

第2回泉佐野丘陵緑地運営会議

日時：2011年8月5日（金） 10:00～12:00

場所：大阪府庁公館

出席委員（敬称略）

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授 増田昇（委員長）

元大阪府立大学大学院 教授 前中久行

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授 下村泰彦

大阪市立大学大学院 工学研究科 准教授 嘉名光市

大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所（CEL）特任研究員 弘本由香里

うみべの森を育てる会 代表 西台幸子

泉佐野市都市整備部 部長 松下義彦

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 会長 殿元日出夫

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 副会長 杉本和彦

オブザーバー

大輪会 末澤事務局長

◆傍聴者

一般 1名

◆次第

1. 開会
2. 出席者紹介
3. 報告案件
 - ①平成23年度運営会議開催計画・実績について
 - ②第5回パークレンジャー養成講座について
 - ③パーククラブ活動報告（6～7月）について
4. 協議案件
 - ①コラボレーション区域実施設計のすすめ方について
 - ②谷口池東側の園路について
 - ③機械の使用について
 - ④パーククラブ秋の対外イベントについて
 - ⑤パーククラブ活動計画（10～12月）について

◆報告案件

- ①平成 23 年度運営会議開催計画・実績について
- ②第 5 回パークレンジャー養成講座について
- ③パーククラブ活動報告（6～7月）について

増田委員長

- ・6月～7月の活動報告でササユリの報告があった。ササユリはどのような場所に群生していたのか、あるいは、水辺の広場での竹の伐採は具体的にどのような作業を実施したのか、「うみべの森を育てる会」との協働作業ではどのような経験ができたのか、などの詳細を補足していただきたい。

殿元委員

- ・ササユリは、谷口池の北西側の堤体部分に群生している。ササユリの調査を2日にわたって実施した結果、201本の個体が確認できた。現在は保護のため、大阪府の協力を得て、「ササユリ群生地につき、立ち入り禁止」という看板を立て、一般の方が立ち入れないようにしている。
- ・水辺の広場では笹がすぐに生えてくるので、毎回30分ほど手作業で刈り取り作業を実施して広場を維持している。
- ・バンブー広場も午前中の時間の許す限り、笹を刈って侵食を防いでいる。
- ・郷の小径も雑草や笹で覆われていたので、除去作業を行い、道幅を広く整備した。
- ・「うみべの森を育てる会」の協働作業では、午前中は雨が降っていたため、活動紹介のビデオを見せていただいた。午後からは雨が止んだので、5班に分かれて作業を行った。1班、2班は笹切り、3班はカブトムシの幼虫保護のための覆いの取り付け、4班はササユリの新株が出たエリアで伐採した竹の除去、5班はビオトープにて外来種の藻の除去を行った。

増田委員長

- ・バンブー広場、水辺の広場では、毎月竹の新芽の抑制作業を行っているのか。

殿元委員

- ・毎月手作業で実施している。囿中H1～H2のエリアではほぼ毎回実施している。

増田委員長

- ・継続した抑制作業によって、芽が小さく、柔らかくなったのではないかと。

殿元委員

- ・毎回作業を行っていることで、芽が柔らかいうちに作業ができている。
- ・ボランティア保険を適用する事例が2件発生した。1件は自らが作業中に鎌で負傷、もう1件は草刈り中にウルシかハゼにかぶれた事例であった。

西台委員

- ・「うみべの森を育てる会」との協働では、パーククラブからたくさんの方に参加していただいた。午後からの作業では、お願いした場所を短時間で仕上げてください、パーククラブのすごさを感じた。

前中委員

- ・ササユリの個体数が 201 本とあるが、どのあたりに多く生えていたのか。

杉本委員

- ・谷口池の堤体部分にばらばらに生息していた。

前中委員

- ・どのような状態で生息していたのか記録しておけば、その後の増減がわかり貴重な資料となる。

殿元委員

- ・現在は、ササユリが確認できた場所に、竹で作成した杭を打ち、ナンバリングをしているが、地図に記録できていない状態である。

前中委員

- ・地図に全てを落とし込む作業は大変である。約 20 メートル区間ごとに何本生えているのか、おおよその状況がわかればよい。学術調査的なデータは必要ない。どのあたりに多いか、少ないか、ということが分かればよい。負担にならない範囲でまとめていただきたい。

増田委員長

- ・ゾーニングでは現地調査を通じてパーククラブの皆さんが問題と感じた点や、目標像が非常に重要になる。

下村委員

- ・現在、現地では広場や竹笹の伐採作業を進めていただいているので、非常にすっきりとした形で整備できており、里山的な風景づくりが進んでいる。
- ・今後は具体的に植生調査の結果や地形のデータを元に、本来のあるべき森の姿を考えると皆さん考えている。
- ・農作業や広場の整備についての希望が増えている中で、森が本来持っている姿はどうあるべきかをパーククラブ内で話し合う必要性を感じている。
- ・大学とも協働しながら調査やゾーニングを進めていきたい。
- ・ゾーニングの計画については、パーククラブと調整する必要がある。急ぎすぎる必要はない。次回の運営会議にて、今後の進め方やどのように将来像を導き出そうとしているか、なるべく多くの意見をいただけるような形で報告したいと考えている。

増田委員長

- ・アンケートにおいて、里山再生について「昭和初期」という記述がある。里山の風景がある時代は昭和 30 年代程度と考えているが、「昭和初期」というと戦前のイメージが先行する。「昭和初期」と書いたのは何か意図があるのか。

杉本委員

- ・「昭和 30 年代」と書く人もいれば、「昭和初期」と書く人もいたので、一つの記述にまとめられている。

増田委員長

- ・現地にある棚田は、戦後の食糧難、昭和 30 年代に整備されたと考えられる。

前中委員

- ・「里山の再生」がテーマになっているが、何を「再生」するのか検討する必要がある。里山も時代によって変化している。どの時代の里山を再生するのか。里山は、それぞれの時代で人々の暮らしと密接に結びついてきたということが重要である。今後、現代の生活とどう結びついていくのかを考えていただきたい。必ずしも過去の時代の姿にこだわる必要はないと考えている。時代を固定せずに、自由度を高く持って考えるべきである。

下村委員

- ・「森のイメージを大事にしたい」という意見もあるが、まだパーククラブの中には、一般公園のイメージを持っている方もいる。パーククラブや運営会議の皆さんと一緒に考えたい。今回実施したアンケートは、まず第 1 回目ということで、それぞれの思いを書いていただき整理したもので、パーククラブ内で合意が取れたものではない。今後実証や勉強を重ね、コラボレーション区域全体のゾーニングについて、議論していきたいと考えている。

嘉名委員

- ・何人にアンケートを実施したのか。

殿元委員

- ・パーククラブのメンバーを対象にアンケートを実施し、28 人から返答があった。

嘉名委員

- ・アンケートの情報量が多い。いろんな方の思いが掲載されている。アンケートを将来像として集約するためには工夫が必要である。皆さん、いろんな思いを持っておられ、今後もクラブ員が増えるにつれて、思いも膨らんでいくことが予想される。場合によっては、風景、環境、子どもたちとのアクティビティ、植生など、テーマごとにグループを作って、そのグループで話し合うなどの工夫が必要である。

下村委員

- ・森の将来像を考えていく上で、判断材料や条件を作る必要性を感じている。大学で調査として実施していきたいと考えおり、作業を始めている段階である。
- ・植生条件や斜面の様子など、物理的かつ基礎的な点から、森の将来像について解析していきたい。さらに、運営会議での意見を重ね合わせながらゾーニングを確定していきたい。

弘本委員

- ・シナリオ型の公園づくりという理念を尊重した進め方をしていくべきである。目指すべきイメージと、それぞれ個人で持っているイメージをうまく集約しないと、「自分の意見が反映されていない」と思われる危険性がある。それぞれの思いを大切にしながら、ゾーニングを進めるための比較的わかりやすいアプローチが必要である。

増田委員長

- ・意見が多くてまとまらないという理由での多数決は分裂を生む。全てのエリアのゾーニングについて、確定できるだけの人数も体力もないので、ある一定のゆるやかな方向性の共有にとどめておくことが望ましい。具体的に手をつける部分に対しては、イメージを固める必要があるが、全域については、イメージを固めすぎないように気をつけていただきたい。短期間のワークショップで将来像を確定させてしまうと、従来の公園づくりと同じ方式になる危険性がある。従来のマスタープラン策定型の公園づくりとは違う決め方、進め方を検討するべきである。

前中委員

- ・かつての里山にどれだけ人がかかわっていたかの調査がある。1 ha あたり、1年間で延べ1,000人が整備に関わっていた事例が報告されている。つまり、1日あたり約3人が関わっていた計算になる。それほど里山の管理は大変である。むやみに活動範囲を広げると手が回らなくなる。今の人数でどれだけのことができるのか、実現可能性を考慮して検討していただきたい。

増田委員長

- ・将来像の検討が一番面白い部分でもあるので、ゆっくり時間をかけて楽しみながら将来像を描いていただきたい。

◆協議案件

①コラボレーション区域実施設計のすすめ方について

増田委員長

- ・運営会議は委員の意見を聞くだけの場ではない。具体的にどのような活動を通じて展開していくのか知りたい。説明を聞いていると、参加型のデザインワークショップを実施して将来像を確定し、それを元に工事が進み、パーククラブが作業員のような役割を担っていくような印象を受けた。根本的に泉佐野丘陵緑地の計画はシナリオライティング的に進めていくことが基本計画構想に組み込まれている。実施レベルにおいて、従来型のマスタープラン型の進め方になっている印象を受けた。

事務局

- ・事務局の説明が足りなかった部分があるのかもしれないが、従来のマスタープラン型でないことは十分理解している。
- ・資料の右端の破線になっている矢印の部分は、来年度以降も継続してブラッシュアップをしていくということをお示しているものです。

増田委員長

- ・パーククラブのメンバーが毎年育っていく一方、1期生や2期生だけの段階で計画を確定させてしま

うと、後から入ってきた人は、既に決められた目標像に向かって手伝う、というイメージになってしまう。みんなで議論しながら少しずつ進め、全体像はゆるやかに共有していただきたい。できるところから、体力に応じて徐々に進めていくことを常に意識していただきたい。全エリアを一度に手をつけてしまおうとすると、パーククラブの手が回らない箇所は従来型の公園管理で進めざるを得なくなる。

事務局

- ・今回は、昨年に引き続きアクションプランの作成を予定している。前中委員がおっしゃられていたように、里山の整備について1haあたり3人の人手が必要であれば、当該公園では1日あたり3~40人が必要となり、規模の大きさを認識している。アクションプランを踏まえて、どの程度まで実施可能か検討したい。

増田委員長

- ・基本的にはアダプティブマネジメントの手法にのっとなって進めている。パーククラブの皆さんが植生調査を行い、ササユリの分布の変化や、変化に応じた場所の管理、活動の仕方を毎年議論している。システムや計画にとらわれすぎると、従来型のマスタープラン型の公園づくりと同じ進行になってしまうので、気をつけていただきたい。

事務局

- ・従来型の公園づくりにならないように事務局も注意して進めていく。その都度ご指導いただきたい。

嘉名委員

- ・今回は全体のゾーニングとパークセンターの実施設計がセットになっているのか。

事務局

- ・セットになっている。

嘉名委員

- ・受託される業者さんの能力によるが、パークセンターと全体の実施設計を一体的に検討していただけるのであれば、しっかりとした計画を提案していただけるのではないか。今年度は、パークセンターに対する思いや要望がリアルに出てくることが予想される。規模や居室の構成は早い段階で決まっているので、その内容も踏まえて、バージョンアップしていただきたい。去年はパークセンターの位置や景観を中心に議論を進めてきたが、今年は実際にパークセンターをどのように使うか、という話も進めていただきたい。

事務局

- ・現在200分の1のサイズの模型を作成することになっているが、問題ないかご教示いただきたい。

嘉名委員

- ・200分の1が限度、本来であれば100分の1が望ましい。

弘本委員

- ・他の施設の見学には行かれていないようだが、ぜひ実際にパークセンターを運営しているところに視察に行ってください。規模や施設の性格は場所によって異なるが、小さくともしっかりとしたパークセンターを運営している事例もある。近いところで見学が可能な施設があれば、視察していただくことで、どのような要素がセンターに必要か、どのような使い方をしているのか参考になる。現場を知ることが重要である。まずはインターネット等で検索して事例の情報を集めていただくとよい。

増田委員長

- ・今年度はパークセンター内部の使い方について検討する必要がある。利用者と利用する状況をいくつも想定した上で十分に議論をしていただきたい。デザインだけでなく、使いこなしの視点の中で議論し、検討していただきたい。

前中委員

- ・アンケート分析については、具体的にパーククラブで実行可能かどうか、という視点からも検討していただきたい。パーククラブの意見や意向を尊重しながら、やるべきところ、できることから実施していただかないと負担が大きくなる。

弘本委員

- ・パーククラブの皆さんのスキルや興味を引き出すと、具体的に実現の可能性が見えてくるのではない。敦賀にある中池見湿地でも熱心なボランティアが活動を支えていらっしゃるが、人数に限りもあり、当初描いた計画どおりに進めるのは難しく、実態に合わせて活動対象や管理の範囲を狭めるといいうご苦労もされている。そのような事例からも学ぶことが沢山ある。最初から作りこみすぎるべきではない。

増田委員長

- ・散策路のみを整備し、その後少しずつ、自分達が管理できる範囲で広場や観察のための拠点、水辺の拠点を整備していくことが基本原則である。パーククラブの活動報告にあるように、郷の小径の道幅を確保するだけでもかなりの作業量である。水辺の広場、バンブー広場、レンジャー広場の整備に加えて、大型の休憩施設や棚田の整備まで入れると、かなりの作業量となる。泉佐野丘陵緑地は、人間が関わり続けて進化する公園だということをご理解いただきたい。このようなコンセプトを持った公園は他にはないので、大阪府の内部でも通常の予算獲得の仕組みではなく、新たな予算組みの仕組みが必要ということを意識していただきたい。
- ・コラボレーション区域においては、常に夢を持ちながら拠点が少しずつ増えていくイメージである。しかし、コラボレーション区域の予算を獲得できる2、3年の間に整備を終えてしまいたいという印象を受ける。つくり続ける「活動」が非常に色濃い魅力として存在する公園になることが理想である。

事務局

- ・あと2、3年で予算が無くなることはない。事務局としても長期の予算を獲得する覚悟でいる。

増田委員長

- ・和泉市に池上曾根遺跡という文化庁が管轄の史跡公園がある。史跡公園の場合、一気に調査を実施して、イメージを復元した上で開園している歴史公園が多いが、池上曾根遺跡では、10年前から調査を続けている。歴史公園の一番の魅力、楽しみは遺物が出てくるということである。一度に調査をしてしまうと、この楽しみが薄れてしまう。泉佐野丘陵緑地も同様である。自然の営みについて、理解しながら、あるいは関わりながら、育む楽しさを常に感じられる公園としたい。

事務局

- ・増田委員長から重要なお指摘をいただいたので、本庁も交えて進め方について検討したい。

増田委員長

- ・薄く長く、と考えると時間的余裕もある。皆が楽しみながら育んでいただきたい。

②谷口池東側の園路について

下村委員

- ・護岸について、道路に2トン車の加重をかけても崩れないのか。

事務局

- ・護岸の強度をふとんかごで補強していく予定である。
- ・詳細のチェックに関してはできていないが、工事発注の際には詳細の調査を実施予定である。

嘉名委員

- ・A案とB案のコストの差が気になる。A案の方がしっかりとしているが、コストが安いB案でも十分な仕様のように感じる。
- ・コストが浮いた分の費用は別のところで使えるのか。

事務局

- ・別の予算に回すことができる可能性はある。

増田委員長

- ・基本的にA案とB案を比較する際には、それぞれのメリットとデメリットを示し、比較できるように提示していただきたい。提示いただいた案は、A案にメリットが示されていないため、比較するまでもなくB案の方が優れているように取れる。しかし、A案にもメリットがあるのではないかと。

事務局

- ・事務局側でも十分議論できていないところがあるが、A案とB案を比較したところ、A案の方が間違いなく安定しており、メンテナンスが不要である。また、構造物の変化がすぐに分かる。B案は堅い基礎を作っているが、万が一腐食等で変化した場合、その変化がわからない。

前中委員

- ・ A案のふとんかごを施工する際には、石は後でつめるのか。

事務局

- ・ 後でつめることになる。また、施行位置に既存樹木がある場合は、避けて施工するなど柔軟に対応したい。

前中委員

- ・ ふとんかごであれば、既存樹木がその中にあっても生育可能であるので問題ない。
- ・ 全体を通じて樹木はできるだけ切らないという原則があるが、長期的に安定した構造物をつくるためには、その原則に縛られすぎず柔軟に対応していただきたい。

増田委員長

- ・ 一番はじめに下村委員が言った山すその安定状態によってどちらの案が良いのか変化する。山すそが安定しているのであれば、A案・B案どちらでもよい。不安定な場合はA案を選択せざるを得ない。

③機械の使用について

増田委員長

- ・ 「うみべの森を育てる会」では機械は使用しているのか。

西台委員

- ・ 基本的には手作業だが、月に1度、専門家による植生調査のアドバイスを受け、残したほうがいい場所を事前に教えてもらい、それ以外のところは草刈り機を使っている。
- ・ チェーンソーは、ボランティアが使うことはなく、公園管理事務所に任せている。

増田委員長

- ・ コンセプトブックでは効率性を求める必要はないということと、チェーンソーなどの機械作業については、大阪府の職員に依頼するという内容が整理されている。
- ・ 刈り払い機は使っても良いかもしれない。しかし、チェーンソーは簡単に木が切れてしまう点と危険性が高い点があり使うべきではない。

前中委員

- ・ 機械を使用する場合は、慎重に注意深く作業していただきたい。事前の講習の受講はもちろんのこと、作業時には、刈払い機で作業をしない人が監督員をするなど安全性を高めるための対策が必要である。
- ・ 法令、制度を犯すことは許されない、という大前提のもと、しっかりと安全管理をしていただきたい。

事務局

- ・ パーククラブと交換した覚書の中には機械の貸与については記述がないため、「機械貸与ができる」旨を条項に追加して再締結する必要がある。あわせて、怪我をした際の保険や、講習の受講についても

追加すべく進めていきたい。

増田委員長

- ・専門家のグループでも刈払い機を使用する際には、監視員をおく、石を飛ばない防護柵など、安全管理については万全の対策をしている。刈払い機を使う場合は、法令を遵守すると同時に、安全性を確保することを条件として検討していただきたい。

下村委員

- ・講習を受けて適切な保険に加入すれば、刈払い機を利用できるのか。

増田委員長

- ・再度必要性を議論していただきたいというのが結論である。

下村委員

- ・使用目的、条件を決めた上で再度検討する

増田委員長

- ・再度必然性についてきっちりと考えて対処されることが望ましい。安易に作業効率を上げるために使わないほうがよい。そのあたりを再確認していただきたい。

前中委員

- ・専門の業者が作業する場合も、安全道具を装着している。ボランティアはときとして、安全管理が甘く危険な作業をしている場合がある。

④パーククラブ秋の対外イベントについて

増田委員長・夜間活動をする場合は十分に気をつけていただきたい。

- ・泉州産のタコは手に入るのか。

殿元委員

- ・泉佐野漁業協働組合の方を紹介していただいて入手予定である。

増田委員長

- ・泉佐野観光ボランティア協会と協力してイベントを実施するのは初めてか。

殿元委員

- ・初めてである。

増田委員長

- ・イベントをする際、開会挨拶時には、必ず泉佐野丘陵緑地の概要や、どんなことを目指している公園

で、パーククラブとしてはどんなことを目標に活動しているのか、というガイダンスを常に盛り込んでいただくと、泉佐野丘陵緑地の意義や意味が広く伝わる。いずれインタープリターとして活躍していただくので、代表だけでなく、人前で楽しく話しができる人たち何名かで説明していただきたい。

事務局

- ・いつも現地へ向かうバスの車中で説明しているので、今回はぜひパーククラブの皆さんにバスの中で説明していただきたい。

増田委員長

- ・紙芝居のようなパネル、紹介DVDがあってもよい。

殿元委員

- ・前回タケノコ掘りとタケノコカレーのイベントを実施したときにはパネルを展示し、副知事と大輪会の代表理事に、どういう形で公園づくりをすすめているのかを説明した。

増田委員長

- ・次回もパーククラブの皆さんから、活動内容についてご説明いただきたい。

下村委員

- ・パネルの内容について、今後詳細を確定したい。
- ・イベントには必ず参加させていただいているが、委員の皆さんにもぜひご参加いただきたい。

⑤パーククラブ活動計画（10～12月）について

下村委員

- ・ゾーニング計画についてのタイミングはご注意ください。特に向井池周りの周回園路の整備については重要な場所である。どのルートから池に近づくのか、どちらの方面から入るか、周辺に園路がない方がいい場合もある。慎重に検討すべき案件なので、プランがあれば運営会議に一度はかった上で作業をすすめていただきたい。

増田委員長

- ・新しい場所や道を作る場合は運営会議に提案いただき、議論して決めたい。あまり手を広げすぎると大変である。
- ・専門部会はどのような部会ができる予定か。

杉本委員

- ・専門部会については、まだ白紙の状態である。ゾーニングを検討していく中で自分の得意分野や思いについて議論していく中でグループができるのではないかと考えている。

前中委員

- ・水質浄化の実験のために入れた竹炭が古くなった場合、どのような処理を行っているのか。

杉本委員

- ・何度も計画には上がっているが、まだ竹炭の投入は実施していない。投入後の竹炭の処理については今後検討していきたい。

増田委員長

- ・川に竹炭と入れている事例では、一度引き上げて、水で洗って乾燥させた上で、再度使いまわしている。

弘本委員

- ・皆さんがやってみたいと思うことが、うまくグループや専門部会に繋がるようにしていただきたい。

増田委員長

- ・「うみべの森を育てる会」では、専門部会を立ち上げているのか。

西台委員

- ・当初は専門部会を計画していたが、人数が少なかったので、それぞれ得意な分野の人をリーダーにして、リーダーから教えてもらっている。

増田委員長

- ・人数が少ないときには、得意な人がリーダーになり、講習を開催したり教えあう方法が望ましい。

弘本委員

- ・専門部会が細分化しすぎても問題である。

増田委員長

- ・専門部会によって、各分野については特化しつつ、孤立化しない仕組みが必要である。今後、棚田の整備が始まると、森の整備以上に収穫のための手間がかかることが予想される。うまく調整しながら進めていただきたい。

末澤オブザーバー

- ・イベントには大輪会も積極的に参加させていただいている。早い時期に案内があるのでありがたいと思っている。
- ・機械の導入については、チェーンソーは大阪府の職員が行うのがよいと思うが、刈払い機に関しては保険や講習、使用方法についてルールづけがされるのであれば、早急に対応していただきたい。大輪会としては積極的に支援したい。草や笹が繁茂する今の時期を逃すと機械を導入する意味も半減してしまうので、早急に対応していただきたい。

増田委員長

- ・安全性の確保の再確認が最重要である。
- ・チェーンソーはリスクが大きいため大阪府に任せるべきである。
- ・機械の導入については、パーククラブの方で条件を整理して提案していただきたい。

◆次回の日程

- ・9月29（木）10時～12時 府庁周辺にて開催